

第6回実践事例研究会

いじめっ子への関わり

——学校の中での取り組み——

話題提供者 センター協力研究員（1999年度）北区立新町中学校 校長 田 邊 政 範
同中学校 養護教諭 石 山 綾
同中学校 講 師 町 田 朋 美

2000.1.29

事件の発端

平成X年の9月、バレーボール部の2年生の女子が、顧問のB先生（女性）に「部内でいじめがある」と訴えてきた。1年生のA子が核になり、彼女が嫌う女子生徒をみんなで無視するということが行われているという。夏休みの宿泊行事でトラブルがあり、それが契機となって、いじめが始まったらしい。A子が「無視しなかったらぶっ殺すぞ」と周囲の女子を脅し、特定の生徒に対する無視を強制している様子である。

部活顧問のB先生がA子呼び出し、「いじめは絶対いけない」「バレーはチームプレイだから、その中でいじめがあるなんて、とんでもない」「いじめられる立場になってみなさい」と説諭するが、A子は「私は絶対にいじめられません。今までもいじめられたことはないし、これからはありません」と、思いもよらぬ反応。B先生は、部活内だけでは指導しきれないと、C先生（養護教諭）に相談し、B先生とC先生がA子と話すことになる。ある日、A子を部活中に呼び出して保健室で話すが、A子は斜に構えて2人の先生をにらみつけ、「何の話ですか？」といった反抗的な雰囲気、何も語らない。

無視の最初の対象は、A子と同じクラスで同じ部活の女生徒。クラスでも目立ち、仕切るのが上手な生徒であり、部活の1年生のリーダーでもあった。しかし、次第に、仲間外れの対象となる女子がバレー部の外にも広がり、それまでいじめや仲間外れをしたことがない女子をも巻き込んで、この動きが学年全体に広がる。弱い子が対象となるのではなく、リーダー的な子が、次々とターゲットをかえて潰されていくのである。A子自身は自分で前に出ていく子ではない。自分でも他の生徒をまとめられる力がないことを自覚しているのだが、他の生徒に仕切られたり威張られたりするの嫌なので、リーダー的な生徒をターゲットにして、裏から足を引っ張り、徹底的に潰していくようであった。

特定の生徒を対象としたこのような「無視」や「仲間外れ」や「露骨な悪口」が、A子を中核としてどんどん

広がっていったので、学年全体あるいは学校全体で取り組まざるをえなくなった。

学校及びA子についての情報

本校は生徒数約180名の中学校。学区は青少年委員会や町会などの結束の強い地域であり、それだけに保護者等の学校にかける期待は大きい。学校への関心も高く、生徒の顔と名前を覚えている大人が多く、大人が中学生を注意できる地域でもある。したがって、「荒れ」をあまり経験していない学校である。

一方、A子は、4人兄弟の末っ子。兄姉3人はともに私立中学に進学しているが、彼女だけが公立中学に進学している。小学校時代、ほとんど授業に出ずに、他児に「手を出す」「砂をかける」等、悪質ないじめをしていたらしい。小学校時代、ほとんど授業を受けていないので、中学入学後も、授業がほとんど分からない。そのことも関連して、教師に対する態度が入学当初から悪かった。校内の運営委員会では、入学直後から、毎週、A子の話が出ていた。

事態の推移1：緊急学年集会

A子を中心とするいじめが学年全体に広がってきたので、9月末に緊急学年集会を開き、養護教諭のC先生が話をする。「1学期はみんな仲良かったけど、最近みんな元気じゃないみたいだね」「どうやらいじめがあるようだね」「いじめは何があっても絶対許さないし、いじめられている側は私は何があっても守るし、いじめている子は絶対悪いよ」と。しかし、A子は顔を上げず、C先生と視線を合わせない。いじめている側の女子も下を向く。同時に、いじめられている女子も下を向き、「私には関係ない」という雰囲気。学年集会後、いじめに関する作文を書かせる。いじめに関わっていない生徒は「いじめは良くない。私は絶対やらない」と正論を書くが、最もいじめられていた女生徒（バレー部）は「ちょっといじめがあったくらいで、みんなの前でこんなふうに指導して

ほしくない。自分たちのことは自分たちで解決するのだから、いちいち細かくやってほしくない」と否定的な意見を述べる。いじめに関わっている他の（権力の強い）女生徒たちは、「先生は何を言っているのか。いじめられている側にも原因があるのに、こちらにも言い分があるのに、先生がいじめられている側ばかり味方するのはおかしい。性格が合わない子もいるのに……」と反抗的な言葉をつらねる。A子の作文は（文章能力が低いこともあって）何を書いているか分からない。

この集会を契機に、C先生のいじめに対する考え方が少し変わる。「この集会や、その時の話は失敗だったか？」「きれいごとを並べて、『いじめられている側を守る』と言っても、生徒たちは納得をしてくれないのかもしれない」と。日常的に行っている個人面談の時に、いじめの対象となっている生徒に聞いてみたが、何も言ってくれない。いじめに関してポスターを貼って全校に呼びかけたが、逆に、その生徒に「何でああいうの貼るのですか？」と文句を言われる。この時期のC先生とA子との間の「信頼関係はゼロ」であった。A子は様子をうかがいに、たまに保健室にくるが、教師の側から何かを聞き出すことはせずに、「何か話したければ、話を聞くよ」という態度で接している。

一方、部活顧問のB先生は、この時期、A子の「寂しい気持ち」「仕切りたい気持ち」を見抜き、A子を褒めることを始める。「A子が一番バレー部の中でうまい、才能がある」と周囲が彼女を認めざるをえないような言葉をたくさん発する。「おまえが1年生たちをまとめなくてどうする」と自覚を促し、同時に、「バレーはチームプレイなんだ。部の中でいじめがあったらいいプレイはできないし、勝てない。そんな生徒は選手として使わない」とはっきりと伝える。A子はバレーが本当に好きであり、これが少し歯止めになる。A子もB先生には心を許しているようであった。

事態の推移2：先生たちとの対話

10月になっても、いじめは相変わらず続く。同時に、多くの生徒が教師に対して反抗的になってくる。A子に従っていれば教師に反抗できると、今までおとなしかった生徒たちまで、特定の教科の授業には出席しない等の行動を示し始める。対象は全て女性教師であった。

このような時、A子が授業中に漫画を読んでいて、教科の先生（D先生：女性）に漫画本を取り上げられるという事件が起きる。A子は、当日の放課後、職員室にやって来て、D先生に食ってかかる。「他の人もやっているのに、どうして私ばかりを叱るのか！他の子はお菓子も食

べているのに！」と。数日後、再び職員室にあらわれる。「また文句を言われるのかなあ」とD先生が覚悟していると、担任の先生の批判を初めて話す。D先生に何度か文句を言っているうちに、「この先生は話を聞いてくれるかもしれない」と思い始めていたようでもあった。

同時に、この日、A子は理科の授業に他の生徒と2人でわざと遅刻し、漏斗をわざと落とし、それを踏みつけ、さらに手でそれを片づけ、「わざと怪我をして」（A子自身の言葉）、理由を作って保健室に来る。C先生は傷の手当てをしながら、「自分のからだを傷つけてまで反抗するというのは絶対許せない！」と激しく怒る。A子は、「先生は怒るべき時にちゃんと私のことを怒ってくれる」「だからその指導は納得できる」という意味のことをC先生に語る。

漫画本のことでA子に頻繁に噛みつかれていたD先生は、前々から「自分だけでは抱え切れないから、学年で関わって欲しい」とSOSを発していたが、ちょうどこの日に、学年の先生でA子話を聞いてみるということになる。この日の夕方、C先生と他の女性教師と2人で、A子話をじっくりと聞く。A子は担任への激しい不満を語る。C先生自身にも「納得できるような」不満、「そんなことされたら辛いね」と思えるようなことが次から次へと出てくる。「でもC先生は下っ端だから、担任の先生には何も言えないよね」と分かっている。

D先生とC先生の求めに応じて、後日、校長が、A子と、彼女といつも一緒に行動している女生徒の話を1時間余り聞く。いじめられる生徒の親からも「学校は何をやっているんだ」というクレームがあったからでもある。校長は「とにかく二人の話を一生懸命聞く」。「大人は～、先生は大人だからみんな～」という彼女たちの話から、「よっぽど小学校時代に担任に痛めつけられてきたんだな」と感じる。「中学校へ入って、環境変えてなんて思っていたのに、担任が話を聞いてくれなくて、不満がたまっているのだな」と思って、ひたすら話を聞く。「担任は何かあると私たちが悪いと言う、私たちのせいにする。私たちはもう見捨てられているんだ」「『A子に関わるな』と担任が他の生徒に言っている」「卒業生も親も、『（あの先生に）一度目をつけられると見捨てられてしまう』と言っている」等々の訴えがえんえんと続く。「校長先生ならば担任にいろいろ言えるだろう」という期待もある。校長は、「痛いところ突かれるなあ！」と感じながら、担任の立場も考え、複雑な思いを抱きつつ聞いている。

その日は、「何か困ったことがあったらまた来なよね」と話して別れたが、その後、校長は、A子と廊下で会った時など、なるべく声をかける。「B先生が、『A子はバ

レーで頑張っている』と言っていたよ」「C先生が『運動会でA子が一番働いている』と言っていたよ」「D先生が心配していたよ」等、A子をバックアップする先生たちをバックアップするような言葉をかける。また、A子が出場する部活の試合は、日曜日であっても、ほとんど見に行く。

事態の推移3：C先生への甘え、大人への信頼

11月、登校時、偶然に出会ったA子の目が腫れている。家で結構泣いていたりすることがあるらしい。明らかに泣いたと分かるのだが、C先生には「泣いていないです。ちょっとぶつけたんです」と言う。しかし、眼帯をもらいに来たり、少しずつ助けを求めに保健室にやって来る。来室回数が増える。話すことも増える。そして、その頃からいじめることが急激に減る。いじめは悪いと分ったからやめたというのではなく、「A子自身、何か満たされ始めたのか」とC先生は感じる。C先生には「大人なんて大嫌いで、みんな信用できない」と語るようになるが、本当の素直な気持ちがようやく言えるようになってきたのであろう。

A子が2年生になってから、スクールカウンセラーを招いて研修会を開き、A子に関する事例研究を行う。スクールカウンセラーからは、A子に関して「兄弟がみな私立中学に行っているし、親はこの子にあまり関わっていないのではないか。寂しい子ではないか」という指摘がある。家庭は放任主義で、お金は与えるけど愛情は与えないという雰囲気かもしれないとも感じられる。C先生はこの指摘を聞いて、「ますますこの子を受け入れたい」と思う。A子は「家にいてもつまらないから、昨晚は隣のコンビニに行って、夜1時まで雑誌を読んでいた」等のことを、C先生に率直に語るようになる。目が腫れている時に、「泣いたの？」と尋ねると、正直に「昨日、兄弟と喧嘩して泣いたんだ」と語る。C先生の前で、友達関係のことで大泣きしたこともある。少しずつ素直に

なってくる。そしてこの頃には、いじめは「嘘のように」なくなっている。

振り返って

A子の心の中の「飢え」が学校の中である程度満たされ、学校の中で安定した位置（居場所）を獲得し、「目立つ子」「仕切れる子」「リーダー的な子」を蹴落とすことをしなくても、安心して人の中にいられるようになることで、「いじめ」行為から脱け出していった事例と思われるが、その背景について考えてみたい。

彼女の変化の要因の第1は、バレーボールとの出会いであろう。勉強はできないが、バレーボールという、周囲から認められるものに出会えたことは大きい。彼女の運動神経の良さもプラスしたが、たまたま3年生の部員が少なく、1年生でも力があれば試合に出場できたという状況もプラスになった。2年生になってからは、他の部員との人間関係も改善され、部活顧問のB先生は彼女を「次期のキャプテンにしようか」と考えているほどである。バレー部という「集団」の中で安定した位置を獲得したことも重要である。

変化の第2の要因は、A子を辛抱強く見守る「大人」に出会ったことであろう。体育会系的に明確な指針を示してA子と対峙しつつ、A子を励ました部活顧問のB先生、漫画本を取り上げるという形で明確な規範を示しつつ、A子の話に耳を傾けたD先生、A子の甘えを受け止めた養護教諭のC先生、そして、A子に温かな目を注ぎつつ、同時にA子を支える3人の先生の努力を背後から支えた校長の存在が、「大人なんて大嫌いで、みんな信用できない」という強烈な不信感を抱いていたA子の気持ちを少しずつ和らげ、大人への信頼感を醸成していったと思われる。

そして、この2つのことが、いじめという行為に頼らなくても、安定していられるA子を生み出したのであろう。